あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第94回

沖縄に東アジアのシビックテッカー大集合!

●Code for Japan
明主 那生(みょうしゅ なお)

Code for Japanの明主です。2019年6月8～9日に沖縄県沖縄市で行われたイベント「海越えミート&ハック」についてレポートしたいと思います。

Code for JapanはIT技術を活用した地域課題の解決を目指す非営利団体です。そのような活動は“シビックテック”と呼ばれ、日本国内に限らずアジアの各地、世界各国で行われています。

筆者は非IT技術者である自身の経験から、どうすればシビックテックの活動が開発者だけのクローズドなコミュニティではなく、オープンに広がって行くのかについて関心があります。今回のイベントでは、オープンで多様性の高いコミュニティを運営する台湾／香港のg0v[注1](ガブゼロ)のメンバーを迎えるとともに、課題解決をテーマにしました。これによって、多様性に富んだ非常にコラボレイティブなイベントとなりました。そうした雰囲気をなぜ作ることができたか、イベントレポートを通して特徴的だった要素について触れたいと思います(**写真1**)。

注1　https://g0v.tw/en-US/

海越えミート&ハック(Facing the Ocean Meet & Hack)とは

「海越えミート&ハック」はCode for Japan初となる国際的なイベントです。台湾、香港、韓国、日本より、g0v(台湾／香港)、Parti(韓国)、Slowalk(韓国)、Code for Japanで企画／運営チームを結成し、シビックテックをはじめとするさまざまな組織から30名を超える参加がありました。これまでも個人同士による連携はありましたが、イベントとしてこの

▼写真1　会場のStartup Lab Lagoon前での参加者の集合写真

3ヵ国のシビックテックコミュニティがコラボレーションするのは初めてです。各国で活動する人たちが一堂に会することで、協力して1つの課題解決をテーマにプロジェクトに取り組み、コミュニティ間のネットワークを強めることを目的に企画しました。

「どうせ集まるなら地理的な中間地点、沖縄で。」そんな一言で決まった沖縄開催ですが、今回のイベントは、地元ホストの協力により沖縄の魅力が存分に詰まった内容となりました。会場であるStartup Lab Lagoon[注2]は沖縄市が運営する創業支援拠点で、3Dプリンタなどデジタルファブリケーションの設備が整備されています。オープニングはエイサーと現地のバンドによるパフォーマンスに始まり、イベント中の飲食物は会場周辺の地元の協力をいただきました。地元からの参加者もありました。

海越えミート＆ハックはg0vのハッカソンイベントであるJothon[注3]にならい、2日間で集中してプロジェクトに取り組むイベントです。参加者はプロジェクトオーナーとして自身のアイデアを提案し、プロジェクトメンバーを募ります。中にはすでに活動しているものや、今回初めて持ってきたアイデアなどその形式はさまざまです。今回は合計10チームのプロジェクトがありました。

政治の分野では、「中国本土への容疑者引き渡し法案について」や、「デマ（Disinformation）と誤情報（Misinformation）が引き起こした世界の事件について」、「政府のオープンガバメント推進を支援する取り組みについて」考えるプロジェクトがありました。そのほかにも、ジェンダーの分野では「女性問題に関する法や事件をまとめたデータベースの構築」、ローカルのテーマとして「沖縄の子どもの貧困について考える」や「誰もが参加できるビーチクリーニングのプロジェクト」（**写真2**）など、さまざまなプロジェクトに取り組みました。

国籍を越えたコラボレーション――競争ではない、実現するためのイベント

今回のイベントの重要なポイントとして、“競争することが目的ではないので、表彰・勝者敗者はありませんし、メンタリングや細かなテーマ設定はありません。”というポリシーを主催者側で決めたことが挙げられます。

“ハッカソン”というと、短時間でプロダクトを開発し、その成果を競い合う、競争のイメージがあります。しかし、今回のミート＆ハックでは、参加者がそれぞれの活動について紹介し合い、相互に学び、まずはプロジェクトを通して“友達になること”を目指しました。イベントの間だけの短時間の成果ではなく、イベント後も続く課題解決の実現を目指しました。テーマが社会課題の解決ですから、プロジェクトオーナーの私利私欲のためではなく、公の利益のためにみんなで協力して実現しようというモチベーションが働きます。

また、競争ではないので、スキルのある人が1つのプロジェクトにだけ貢献するのではなく、ノウハウをシェアして複数のチームをサポートする参加者もいました。たとえばある参加者は、外国に行ったときに現地の公共交通機関の利用など、旅行者がはじめは戸惑うHow toをきれいなフォーマットでまとめてネット上で公開できるツールを作っていました。2日目には、この参加者が自身のプロジェクトを活用して、ほかのチームが開発に取り組んでいた、ビーチクリーニングのマッチングサービスの利用方法を説明しました。

プロジェクトにはイベントの実施前からすでに活動しているものもあり、イベント開催期間中だけの途中参加OKなものばかりです。多くの参加者の意識としてコラボレーションのハードルがとても低

▼写真2 ビーチクリーニングのプロジェクトを紹介する、呉屋由希乃さん

注2 https://lagoon-koza.org/
注3 https://jothon.g0v.tw/

く、プロジェクトチームへの出入りは自由でした。そこには、参加者自身がオープンソースのプロジェクトやコミュニティ活動をしているために、不特定多数の人たちが協力することで生まれる成功体験を感覚として持っていることが関係しているように思います。決まったメンバーで知恵を絞ることよりも、多くの人間が関わったほうがより良いものができることを知っているので、新しい仲間が増えるときに溶け込む際のコミュニケーションコストを高くとらえずに、新しいメンバーの参加を歓迎できるのではないでしょうか。

また、ここでも競争が目的ではないことから自分たちのアイデアを守る必要はなく、プロジェクトオーナーも、貢献者であるプロジェクトメンバーもオープンなマインドで関わることができます。社会課題の解決には、実現するのにも長い道のりが必要で、1人で取り組むには大き過ぎます。だからこそ、多くの人との助け合いによって実現を目指します。

筆者が感じた印象としては、誰かのプロジェクトをこの週末だけ自分のスキルでお手伝いする、そんな感覚です。そうして、たくさんのプロジェクトメンバーによる貢献によってプロジェクトの実現に向けた成果がひとつひとつ重ねられていきます(**写真3**)。

多様なバックグラウンドを持った参加者との協働

2つめに印象的だったポイントは、「誰もがプロジェクトに貢献できる」という雰囲気でした。参加に必要なスキルに制限はなく、プロジェクトに合わせて異なるタレントを活かすことができます。法律家や映像作家、活動家、開発者、デザイナー、プロジェクトマネージャーなど、参加者の専門領域はさまざま。専門が同じでも、台湾、香港、韓国、日本の4地域から集まるため、文化的背景も異なります。

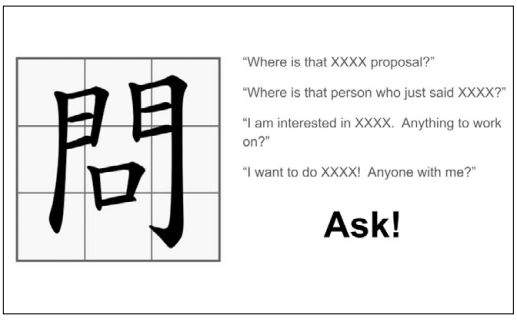
2日間の最後に行われたプロジェクトの進捗発表では、活動内容の5ヵ国語への翻訳や、文化によって異なるシビックハッキングについての議論、プロダクトを広めるためのスライド作成、Webサイトの立ち上げ、データベースの構築とそのビジュアリゼーションなど、それぞれのプロジェクトで進捗がありました。

では、こうしたアウトプットがなぜ可能だったのでしょうか。協業が良いことがわかっていても、なかなか実行は簡単なことではありません。その鍵は導入のグランドルールとCode of Conductにあったのではないかと思います。

イベントの導入では、いくつかのグランドルール、みんなが気持ちよく参加するための最低限のルールとCode of Conduct(行動規範)が説明されます。中でも印象的だったのが、「なんでも質問してください」ルールでした(**写真4**)。技術的なコミュニティやプロフェッショナルな場では、相手に失礼がないように聞く前に最低限自分で調べることがマナーで、それをいつの間にか相手にも求めるようになっていました。コミュニティイベントでそういった雰囲気を作ってしまうと、気を許せずガチガチになってしまい、「知りたい」と思って新しく入ってきた人が質問できる場になんてとてもなりません。クローズドな印象を持たれがちなテックコミュニティだからこそ、あえてこのルールを説明することで、

▼写真3　翻訳作業中のチームの様子

▼写真4　「なんでも質問してください」ルールの説明スライド



わからないことがあったときに気軽に聞ける空気作りをしています。

それ以外にも筆者が体感したこととしては、お互いを批判ばかりすることなく、互いを尊重し合いながらの議論も当たり前にでき、気持ちよくプロジェクトへの参加ができることです。参加者にはコラボレーションが得意な人たちが多いです。それぞれが自身のスキルを活かしてプロジェクトに参加でき、筆者自身も達成感がありました。文化背景も違えば専門領域も違う多様な人たちとチームを組んで、一緒にプロジェクトに取り組みました。互いに日常ではなかなか出会うことがない人たちばかりで刺激があります。筆者自身、初めて"活動家"という肩書きを持つ人にシビックテックのコミュニティで出会いました。日本とは社会情勢が異なる台湾では、自身の主張を持って政府に働きかけなければ自身の生活が変わってしまう、人権さえも守られないという現状がある。そんな社会情勢の違いを感じました。

イベントを終えて――4地域の絆を強くする You are not alone.

2日間、参加者は生活をともにして、同じ時間を共有しました。協働作業から、今まで見えてこなかった一面が垣間見(かいまみ)え、関係がより深くなり、まさに友達が増えたように思います。

筆者自身も、g0vの2年に1回のサミットやCode for Allと呼ばれるシビックテックの国際的なネットワークの会合に出席してきましたが、そのイベント会場の交流だけでは関係を深めることは難しく思っていました。今回のイベントを通じて気がついたことは、各国のシビックテックプレイヤーに共通すること、Code for Japanのスローガンである「ともに考え、ともにつくる」というマインドを持っていることでした。

こうしたコミュニティイベントの一番の良いところは、海を越えた向こうにも自分たちと同じようにミッションを持ってシビックテックという活動をしている仲間がいることを感じられることです。コミュニティのプロジェクトを運営していると、「何を1人でやっているんだろう」「誰にも受け入れられないんじゃないか」とふと不安になることがあります。シビックテックもまだまだニッチな分野であり、活動を続けていて孤独を感じることも少なくありません。異なる地域、分野で活動していても「ITで地域課題の解決」を共通項につながれる。そうすることで、自分だけではない、同じ分野で活動する仲間がいるし、協力もできる。そう感じられることは個人にとっては大きなことだと思います(**写真5**)。

東アジアのシビックテッカーが一同に集まったことで各国の活動やノウハウを共有し、それぞれの国の取り組みについてより関心を持つきっかけとなりました。シビックテックという分野にとどまらず、今回は異なる分野からのローカルの参加もあり、つながりをさらに広げる結果になりました。まずは近い価値観、文化を持つアジア圏内のシビックテックコミュニティの協業から始めることで、結束を一層強め、世界的なグローバルネットワークに貢献していきたいと思います。

また、9月にはCode for Japan Summit 2019が千葉で開催される予定です。シビックテックに興味を持っていただいた方はCode for JapanのFacebookページ[注4]を覗(のぞ)いていただければと思います。SD

注4　https://www.facebook.com/codeforjapan/

▼写真5　東京から15歳の女性エンジニアの参加者もありました